

『異本義経記』と『予章記』との関係について

八 木 直 子

一 はじめに

『異本義経記』は、『義経記』には見られない、異伝や異説を多く収めた作品である。『異本義経記』は『義経記』の異本というよりは、むしろ注釈書といえる。本文に付けられている注記は、典拠が明記されているものと、「伝に曰く」や「或は曰く」など、典拠が不明なものがある。

『異本義経記』の成立については、先行研究によって、以下の通り指摘されてきた。

まず、志田元氏は、冒頭に「小田系図」を引用すること、下巻に蝦夷渡海伝説に関する記述があること、更に『山城名勝誌』に引用されていることから、延宝年間（一六七〇年代）〜正徳元年（一七一）とした。¹⁾

つぎに、倉員正江氏 下巻に「梶原景茂静無礼」の章段で『丹後海陸巡遊目録』を引用していることと、元禄一六（一七〇三）年刊行の『義経記評判』に引用されていることから、延宝五（一六七七）年〜元禄一六（一七〇四）年の間とした。²⁾

また、大城実氏 志田・倉員両氏の論を踏まえて、『異本義経記』原本は近世初期に成立したものである。³⁾

つまり、注記における、典拠が明記された資料の成立時期から、おおよその成立が近世（一六〇三〜一八六七）初期と想定できるということである。しかし、本文と注記を同時代に成立したと、現段階において断言することはできない。以上のことから、本論では、『異本義経記』に引用される吉岡本を含む（以下、吉岡本とす

る）、河野氏が登場する部分について、これまで触れられなかった『予章記』との関係から、『異本義経記』の成立について考察する。

二 『予章記』について

では、『異本義経記』の本文を見ていきたいと思います。本論において使用するのは、叡山文庫蔵本である。また、旧字体については、現行字体に改めた。『異本義経記』「湛海被斬」の後半部に、以下のようにある。

『異本義経記』叡山文庫蔵本

吉岡本に、¹⁾源頼義朝臣伊予守たりし時、彼の国にして七所に八幡を勧請あり。同じく七仏薬師の尊像を七所に安置し給ふ。其の頃宮廉杖と云ふ者あり。実方中将の子孫なり。予州桑原寺にて出家して、廉杖律師と云ふ。²⁾頼義此の律師をして湯月の八幡の社僧にし給ふ。又頼義の四男、伊予権介親清、河野新大夫親経の掣として、其の家の家督を継ぐ。³⁾然れども子なきことを親清室家嘆きて自ら予州三嶋大明神に参籠通夜しありしに、⁴⁾宮内に大蛇頭はる。是三嶋大明神なり。室家更に怖れずして、彼の大蛇と密通有りて懐妊、男子を産めり。⁵⁾河野通清是なり。通夜で儲けたゆゑに、⁶⁾通の字を家の通り字とす。

ここでは吉岡本から引用した話しを載せている。内容は、①源頼義が伊予守であった時、伊予国に七ヶ所に八幡を勧請し、七仏薬師を七ヶ所に安置した。②頼義

は、予州桑原寺で出家した倭杖を八幡の社僧とした。③頼義の四男の親清を、河野親経の婿として、河野氏の家督を継ぐ。④親清には子どもがいなかったことを嘆いた妻が、三嶋大社に参籠する。⑤妻は、三嶋大明神である大蛇と密通し、男子を産む。⑥こうして産まれたのが、河野通清で、通夜して身ごもった子であるから、「通」の字を河野家の通字にした。以上六点にまとめることができる。

この引用部分について、検討すべき点だが、吉岡本の存在、親経の出生、通清の出生に関する三点である。

まず、吉岡本からの引用は『異本義経記』の中に六ヶ所もある。そのほとんどが鬼一法眼に関する部分に集中している。吉岡本によると、鬼一法眼については、「律師祈禱の丹誠を抽んず。之に依つて河野の祈りの師として、親清夫婦信心あり。倭杖律師四代の孫、伊予の吉岡にて出生、鬼一丸と云う者、法師になりて吉岡憲海と云ふ」とある。鬼一法眼は河野家の祈禱師を務めていた、倭杖律師の四代の孫であるとしている。すなわち、『異本義経記』に引用された吉岡本において、鬼一法眼は河野氏と縁のある人物と設定している。

『義経記』の異本の一つとされる吉岡本については、これまで、島津久基氏が『義経傳説と文学』において「吉岡氏のこと詳しいから、恐らく吉岡流の剣道家が偽作又は『義経記』に添加した作であろう。」と吉岡流の剣道家との関わりを推測している。しかし、吉岡本については、『国書総目録』にも記載されておらず、現在その詳細は不明である。つまり、『異本義経記』のみ、吉岡本の内容を知ることができる。さて、この箇所での吉岡本の記述は、どのようなものを典拠としたのか考えてみたい。

まず、『河野氏系図』には、「親経に一女有り。源頼義当国の国主として在国。其四男を一女に嫁して。家を継ぐ。親清。是にも男子なし。表明神に一七日参籠して懐胎す。其子通清。明神密に通る義を以て。通を諱の通り字とす。」とある。吉岡本と共通なのは、③・④・⑥である。これに対し、①の八幡宮の勧請や七仏薬師の安置や②・⑤の話はない。

また、親清については、『尊卑分脈』を確認しても、源頼義の四男に親清という人物は記されていない。

親清を河野氏の婿として家督を継がせているという話を考える上で、興味深い資料として、『予章記』がある。『予章記』は、伊予河野氏に関する歴史・由来を編年体で書いたものである。同家に伝わる古文書や『平家物語』・『吾妻鏡』などを参照して書かれたとされる。

伝本については、活字の群書類従本の他に、『国書総目録』によると、写本が国立国会図書館・国立国会図書館支部内閣文庫・国立国会図書館支部静嘉堂文庫・京都大学図書館・慶応大学図書館・東大教養部・東大史料編纂所(二冊本)・東大史料編纂所得能通忠蔵本写・東北大狩野文庫(元禄六野積写)・広島大(天和二写)・愛媛県立図書館伊予史談会文庫(二卷一冊)・山之井本子章記(一)・金沢市立図書館加越能文庫・市立刈谷図書館・島原市立島原公民館松平文庫・彰考館文庫・神宮文庫(万治二写)・尊経閣文庫(上卷、延宝六年写・二卷一冊)・お茶の水図書館成實堂文庫・天理図書館(江戸初期写)・旧彰考(戦災で消失)、以上、二十二本が紹介されている。

また、『古典籍総合目録』には、群馬大学新田文庫・今治河野美術館・加賀市立図書館聖藩文庫の三本がある。この他に、佐伯真一氏によると、愛媛県立図書館の三本(上蔵院本(旧伊達図書館蔵本の写)・仮称残闕本・得能本の抄本)などを含めると、三十二本と多く伝本が残っている。

中でも、原本に近いと言われるのが、高野山上蔵院本(旧伊達本)である。(以下、上蔵院本とする。)これに増補を加えたものが流布本である。流布本については、長福寺所蔵本を使用する。ちなみに、群書類従本も流布本の系統であり、長福寺本との相違が少ないため、「長福寺本」を使用することにした。上蔵院本と流布本の長福寺本には、後に述べることになるが、相違が見られる。このことについて、佐伯真一氏は、『予章記』の中の『平家物語』の関連部を検討し、上蔵院本と長福寺本との相違から、「現存上蔵院本には一部に近世以降の改作が加えられているものと見る」と結論付けている。

また、『予章記』の成立については、先行研究により、上限が応永十六年(一四〇九)とされ、下限はおおよそ十五世紀(一四九九)までに成立したとされている。また、流布本については、十五世紀の後半とされている。つまり、現在の「上

蔵院本」は部分的に、近世に入ってから改作されているものの、原本にあたる『予章記』は、『異本義経記』より、以前に成立していることになる。

さて、『予章記』上蔵院本の通清に関する部分については、以下の通りである。

『予章記』上蔵院本「玉澄子孫繁昌の事」

親孝の御子親経「河野新太夫、亦氏長者」、此ころ清和源氏の正統伊与入道頼義当国司たりしか、親経と心を合せて国中四十九ヶ処の薬師堂、八ヶ処の八幡宮を草建せられ、最希有の善根也。しかるに親経に嫡子なきか故に頼義の末子を簪にとる。頼義の息四人あり。長子は八幡太郎義家、源氏正統陸奥守に任ず。次男加茂次郎、三男新羅三郎義光、甲斐源氏の始祖なり。四男三島四郎親清を河野冠者伊与権介と号して家督を続かしむ。是故に頼義より赤地の錦の鎧・直垂・白旗等を相伝す。平治二年には、後白河院の宣旨にて伊与の国務職に任ず。又親清にも長子なし、故に河野家系の浪絶せん事を悲み、親清の妻室氏神三島の社へ一七日参籠ありければ、最も不思議の御託(託)宣ありて、第六日の夜半に長十六丈余の大蛇御枕下に寄り臥すと夢の中に思召て懐胎あり。其後男子を儲け玉ふか、其容颜人に勝れ、御長八尺にあまり、面脇に鱗あり、俣みて背溝なし。故に面前の異相を耻て常に手を以て面をかさし玉へば、時俗河野の物耻と称す。其後烏帽子にて手形を付る事も此人より始むとなり。是を河野新太夫と号す。後に伊与の権介通清と改む。尔しより通字を家の嘉称とす、所以は何氏神一夜密通の巨益を以て河野の家督凶滅せさればなり。然るに家来の雑人等家の例なれはとて己が苗字に用いること甚以て其謂れなし。

吉岡本との共通点は、①の薬師堂や八幡宮の創建について書かれている点、③の頼義の末子である親清が河野の家督を継いだ点、④親清の妻が、三島大明神に参籠して男子を懐妊した点、⑥「通」字を家の嘉称とした点で共通である。また、吉岡本の記述と比較すると、頼義の子息についての紹介があること、頼義の末子である親清が家督を継いだため、頼義から河野氏へ鎧・直垂・白旗などが贈られたこと、三島大明神で託宣によって懐妊したこと、通清の容姿が特異であるため、いつも手

をかざして顔を隠していたことなどが詳しく書かれている点で異なる。

さらに、『予章記』長福寺本では、以下の通りである。

『予章記』長福寺所蔵本

親考(孝)子親経「河野新大夫、又、氏長者と云。」此比清和源氏の正統に伊与入道頼義、当国の国司として在国あり、親経と同志にて、国中に四十九ヶ処之薬師堂、八ヶ所八幡宮建立せらる。毎事知己なり。親経には女子一人計にて相統する者なき故に、頼義の末子を簪に取家を令統。頼義の子四人あり、嫡子は八幡太郎義家、源氏之正統任陸奥守、其子六条判官為義、其子義朝、其子頼朝等是也。次男加茂次郎、三男新羅三郎義光、甲斐源氏の元祖也。四男三島四郎親清と号す。家を継て河野冠者伊与権介と名く。故頼義より依契約赤地錦鎧・直垂・白旗等相伝す。平治二年後白河院宣を承て任伊与国々務職。又、親清にも長子なかりければ、女中「親経之女」、氏神三島宮へ参籠ありて家事を祈請せらる。其比迄は家督たる人の社参には、丑時に諸社燈明を悉消して参玉へば、明神も三階迄御出有て御対談有し事也。如其女中参勤有て心中の趣具給へは、明神も下らせ玉ふ。就中長子無ては誰に家をは可令統仰有ければ、明神の御声にて、親清は異姓にして他人也、努々不可為種姓とありける。女中、然我身を何とて男子とは成らし玉わぬや、さては子孫を御絶し可有哉と申玉へは、明神も道理に攻られ玉ひて、然は今一七日伺候有れとて神はあからせ玉ふ也。御託宣に任て又七ヶ日御社籠有ける。第六日に当る夜半ほとに、長十六丈余の大蛇の身を現、御枕下に寄給ふ。本より大剛なる女中は少しも不騒、其時より御懐妊有て男子一人出来給ふ。其形常の人に勝て容顔微妙にして、御長八尺、御面と両脇に鱗の如なる物あり、小(少)し跣て背溝無也。而前の異相なるを耻給て人に向事を慎み、常に手を挿頭給へは、河野の物耻と申伝たり。烏帽子に手形の有事も此謂なり。河野新大夫と云、後に伊与権介通清と称す。是より通字を名乗る也、其故は明神一夜密通の義を以て云爾、即大通智勝の理顕然たり。然を今諸人は名乗る事太以不可然也。

吉岡本との共通点は①・③・④・⑤・⑥である。注目すべきは、「本より大剛なる女中なれば少も不し騒」とあり、妻が大蛇を見て驚かなかったというのは吉岡本と長福寺本とにしかない書き方である。さらに、「通」と名乗り出したのは、「明神一夜密通の義を以て」とあり、この点においても、吉岡本と共通である。また、吉岡本と異なる点は、上蔵院本で指摘した箇所と同じである。

ここまで、吉岡本の記事について、『河野氏系図』、『予章記』上蔵院本、長福寺本との記事と比較してきた。その結果、吉岡本については、③・④・⑥が同じ点から、『河野氏系図』と記述が近い事が分かった。しかし、『河野氏系図』にはない、親経の妻が三嶋大社で大蛇に驚かなかったという話が、吉岡本と長福寺本に共通であることについて、どう考えたらよいだろうか。その手がかりと思われるのが、『異本義経記』巻一「屋嶋合戦」の河野通経に関する記述である。

通経は義経の烏帽子子、軍法の弟子也。参会の時、通経、義経に語りしとぞ。

とある。つまり、河野通経は、義経の烏帽子子で、兵法においては、義経の弟子に当たるといふことである。この部分について、『予章記』上蔵院本には、該当箇所がない。長福寺本では、以下のように書かれている。

舍弟河野五郎通経と号す。源九郎大夫判官義経の烏帽子子として経の字被出、武芸の器量勝たる故に、甲曾郎（五脱か）と被称。義経の兵書一流相伝、本より家の兵法をも存知の上に、義経の流れを伝授せらる。

長福寺本では、通経は、義経の烏帽子子であったので、義経の一字を取って、『経』の字を付けてもらい、義経の兵法を伝授されたとしている。この、河野五郎通経が義経の烏帽子子（元服の際、烏帽子子親から烏帽子をつけてもらう子）であるという話は、どこからきたのだろうか。通経なる人物は、（原本に近い）上蔵院本には、見当たらず、長福寺本では、通信の弟として登場するだけである。

では、『予章記』が参考としたとされる、『平家物語』や『吾妻鏡』ではどう記さ

れているのか、確認したい。

『平家物語』延慶本

（西笏が高直城に攻めた時に）通信が舍弟、北条三郎通経と云者、（中略）通経申けるは、『弓箭取習ひ、生取る、事も常の習也。同兄弟の間に無情こそ口惜けれ。一日違ゆるし給へ。館の案内者也。手引して通信打落すべし。其後死生は入道殿の計也。』と申ければ、西笏ゆるしてけり。其夜子剋計に、北条三郎を案内者として、後の口より押寄せて、時をばとつくりて、竹林に火をかけ、一時がほど責ければ、城内兵共、下には煙にむせび、上には敵責ければ、不懲して、取物も取あへず、落にけり。大將軍河野介通信被討けり。嫡子川野四郎通信は、川野城を落て、石見国へ引て渡る。

『平家物語』長門本

通信が舍弟北条三郎通経といふ者、（略）通信申けるは、弓矢取る習ひ、生捕らる、事常の法なり、同じ兄弟の中に、情けなくもすること口惜けれ、一日の暇をゆるし給へ、館の案内者なり手引きして、通信を打落すべし、其後死生は入道殿のはからひなりと申ければ、西笏これを放してけり、其夜の子の刻ばかりに、北条三郎通経を案内者として、後の渦地より押寄て、時をどつと作り、竹林に火をかけ、一時が程攻ければ、こらへずしてとる物もとあへず落ちにけり、大將軍河野介通信も討れにけり、子息通信は落ちにけり、安芸国へ押渡りて、沼田郷に引籠る。

延慶本も長門本も、通信は、敵である西笏に寝返り、兄通信を裏切った人物として登場する。また、覚一別本卷六「飛脚到来」では、「通信」が裏切った話は、出で来ず、百二十句本では、河野の名前すら出てこない。『源平盛衰記』では、通信が父通信の敵である西笏に討った話はあるが、通信の名前はない。この「通信」について、延慶本・長門本の「三郎通経」と『異本義経記』や長福寺本の「五郎通経」とが同一人物と考えてみる。そうすると、延慶本・長門本と『異本義経記』

長福寺本とでは、「通経」について、全く異なった描き方をしていることになる。

次に、『吾妻鏡』の記事について、考えてみたい。『吾妻鏡』には、「通経」は登場せず、「通清」については、治承五年閏二月十二日条に「伊予国の住人河野四郎越智通清、平家を反かんがために、軍兵を率して当国を押領するの由、その聞えありと云々¹⁵⁾」と、通清が平家に反旗を翻した記事が見える。『平家物語』(寛一別本)では、通清の子通信が、屋島・壇ノ浦で(源氏側として)活躍したことが書かれており、通清や通経についてはあまり触れられていない。つまり、『異本義経記』は、『平家物語』にある河野氏のエピソードは載せず、『予章記』と同様、通清や通経について載せていることになる。

以上、『異本義経記』と長福寺本に共通の記事があることから、『異本義経記』(吉岡本も含めて)は、流布本である長福寺本と近い関係のものであると考えられる。

三 おわりに

最後に、『異本義経記』注記の吉岡本を含めた、河野氏に関する部分について、『予章記』の記事を中心に考察した。『異本義経記』の本文と注記については、同時に成立しかどうか、また、同一作者によるものかまでは分からなかった。しかし、今回、検討した河野氏に関する話は、注記の吉岡本と本文との両方に登場する。このことから、同時期に取り入れられた話だと考えられる。また、『異本義経記』の河野氏関連部は、『平家物語』とは異なった話を取り入れていることから、長福寺本と近い関係にあると結論付けた。だが、なぜ河野氏の話を『異本義経記』が取り入れたのかについて検証するまでには至っていない。今後は、『異本義経記』の諸本をも視野に入れ、さらに吉岡本の実態に迫りたい。

注

- (1) 志田 元「異本義経記(下)」『伝承文学研究四・五』(一九六四・一)所収『異本義経記』覚書による。

- (2) 倉貞正江『義経磐石伝』と先行史書(一九八六・六)
 (3) 大城 実『異本義経記』の検討(一九九七・一一)
 (4) 高橋貞一「異本義経記」『仏教大学研究紀要』五七(一九七三・三)から引用。本文中の数字・傍線等は私に付す。以下、同じ。

- (5) 島津久基『義経傳説と文学』(一九三三初版 一九七七再版)
 (6) 塙保己一編『続群書類従』第七輯一六七(一九〇四・一二発行)
 (7) 伊予史談会編『予章記・水里玄義』(一九八二・八) 解題による。
 増補版『国書総目録』第七卷(一九九〇・六増補版第一刷発行)
 『古典籍総合目録』国書総目録続編 第二卷(一九九〇・三)

- (8) 佐伯真一「予章記」雑考(一九八七・一二)

- (9) 佐伯真一「予章記」と『予章記』(一九八八・二)

- (10) 上蔵院本・長福寺本の本文は、前掲書注(7)による。「」には割注を記し、片仮名を平仮名に改めた。

- (11) 北原保雄『延慶本平家物語』(一九九〇・六)による。片仮名を平仮名に改め、濁点を付す。

- (12) 国書刊行會『平家物語長門本』(一九〇六・九)

- (13) 永原慶二・貴志正造校注『全譯吾妻鏡』(一九七七・二)

参考文献

- 市古貞次『新編日本古典文学全集 平家物語①』(一九九四・六)
 梶原正昭校注 新編日本古典文学全集『義経記』(二〇〇〇・一)